読めば血が噴き出る！ こんな〝論戦〟読んだことない！

保守 リベラル 激突 思想戦

歴史認識、安倍政権の評価…

おがわ・えいたろう　1967年生まれ。文芸評論家。日本の人口激減現象や安全保障体制の脆弱性に警鐘を鳴らす。2017年正論新風賞受賞。著書に『約束の日―安倍晋三試論』『小林秀雄の後の二十一章』『平成記』など多数

さいとう・たかお　1958年生まれ。ジャーナリスト。監視、格差、強権支配をルポルタージュによって批判してきた。著書に『機会不平等』『ルポ 改憲潮流』『戦争経済大国』『「明治礼賛」の正体』など多数

安倍首相支える思想家

保守 小川榮太郎 VS. リベラル 斎藤貴男

反骨のジャーナリスト

安倍政権下、保守とリベラルの対立は激化しているが、悪罵の投げ合いでない正面からの論争は稀だ。そこで今回、保守の代表的論客・小川榮太郎氏と、権力と対峙するジャーナリスト・斎藤貴男氏が徹底討議。鮮血ほとばしる思想戦から、近代史の中の日本の姿が見えてくる――。

構成・山家圭

激突対談はこうして実現した

斎藤貴男

さる5月下旬、私は小川榮太郎氏の出版記念シンポジウムに招かれ、パネリストの一人として参加した。いわゆる安倍応援団の代表格と言われる人の催しだけに、事前の告知を見たネットユーザーの一部から「斎藤も権力になびくのか」的な非難が寄せられ、「私はそれほど安い男ではない。舐めないでもらおう」と、夕刊紙の連載コラムに書いた。今回の対談は、そんな経緯を見ていた本誌の編集部からのリクエストで実現した。

もともとは昨年11月、拙著『カルト資本主義 増補版』（ちくま文庫）のための取材で知り合った。彼はその際、保守とリベラルが完全に分断され、タコツボ化してしまった近年の言論状況を嘆き、この点には私も大いに共感した。お互いに論戦を交わす機会を作っていこう、という話になり、ここまで持ってくることができたのが嬉しい。

対談は3時間半にも及んだ。当然、噛み合うところも噛み合わないところもあった。最も相容れないのは、対米関係をめぐる価値観である。このテーマをより深く取材し、考えていかなければならないと、改めて痛感した。

テヘランに飛んだ安倍晋三首相がハメネイ師との会談を控えていた6月13日午前、日本のタンカーが中東オマーン沖で砲撃された。米国のトランプ大統領は直ちに「イランがやった」と主張。その通りなら米国のメッセンジャーを買って出たことへの報復だし、噂されているような米国による謀略の可能性も、もちろん否定できない。米国の世界戦略にコミットしすぎることは、この上なく危険なのだと、私たちは思い知っておくべきではないのか。

いずれにしても、有意義な対談だったと思う。学ぶことも多かった。いや、本音を言えば、今日日対立する立場の者同士が、礼を尽くして話し合うことができただけでも、私自身の所期の目的は達することができたのである。

また、やってみたい。参院選が終わったら、今度は内政面の話題を中心に。仲間内でオダを上げているだけでは面白くないではないか。

やまが・けい　1975年、埼玉県生まれ。フリー編集者。社会保障専門誌の編集記者（厚生労働省担当）を経てフリーに。一時、保守論壇誌の編集にかかわる

斎藤　安倍首相の対米姿勢から論じたいと思います。安倍政権の外交安保政策は、米国との軍事的一体化への志向が強すぎます。首相が、来日したトランプ米大統領とともに、事実上の「空母化」が進む護衛艦「かが」の艦上で訓示をしたのは象徴的です。

また、トランプ氏はその後、米強襲揚陸艦「ワスプ」に移り、自国民に向けて演説してから帰国していきます。私は、あえて「ワスプ」に向かったところにメッセージが込められていると思う。「ワスプ」はアシナガバチの意味だとされているようですが、一般にはホワイト・アングロサクソン・プロテスタント――「支配者としての白人」を意味する略語です。つまり彼は、そこで演説することで支配者としての力を世界に示したかったのではないか。首相は、そういう「トランプの米国」を絶対視しているかのようです。ここまで強く日米一体化を発信すると、世界には反米勢力もあるのだから、いたずらに敵を作ることにもなる。

小川　安倍首相は現実的な政治家です。日米同盟の強